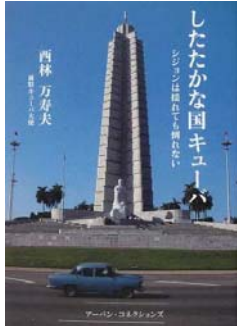
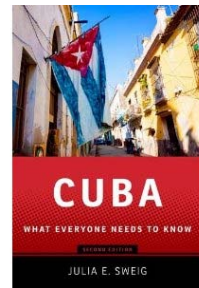


書籍紹介 西林万寿夫『したたかなキューババージョンは揺れても倒れないー』

日本には、いわゆる「キューバ本」というジャンルがあるようです。それらの本では、キューバ研究で客観的な分析を行い、現在のキューバ社会の諸矛盾を認識し、その解決の方向に革命の本質と発展の行方を見ることは、あまり行われていません。そのことから研究の叙述、あるいは現状の報告において、とかく、キューバ革命や現状を一面的に礼賛したり、社会主義・共産主義を間違った思想と断定し、その予断のもとにキューバ革命を一方向的に批判したりする本がほとんどです。前者では、吉田太郎氏の一連の本や田中三郎『フィデル・カストロ』（同時代社、2005年）がそうですし、後者では、ラーテルの本が代表的です（ブライアン・ラーテル『フィデル・カストロ後のキューバ』伊高浩昭訳（作品社、2006年））。



一方、米国やイギリスでは、キューバに関しては様々な傾向の本が出版されており、研究の層の厚さを反映して、かなり客観的な立場で書かれている本も少なからずあります。ジョン・カーク、ホルヘ・ドミンゲス、マックス・アジクリ、ルイス・ペレス、ジュリア・スエグなどの本が、信頼できるでしょう。しかし、これらは、日本では翻訳・出版されていません。



そうした中で、本書、西林万寿夫『したたかなキューババージョンは揺れても倒れないー』（アーバン・コネクションズ、2013年）は、「著者のキューバ大使としての3年半の回想録」ということですが、日本で近年出版された「キューバ本」の中では、かなりの水準をもった本と言ってよいでしょう。レイセスター・コルトマン『カストロ』岡部廣治監訳（大月書店、2005年）以来の客観的な分析と情報を提供してくれる本となっています。

著者は、2009年3月から、2011年7月までの3年半、駐キューバ日本大使として公務に当たられました。本書は、その期間に、キューバを理解するための「序章キューバ小史」を付けくわえて、2009年からの各年のキューバの動きを章としてまとめ、2012年までの4章で構成されています。音楽家、バイオリニストの大使らしく、四楽章の構成としてまとめられたのでしょうか。

4章とも、それぞれの年のキューバ国内の動き、外交関係、日本との関係を、時系列で、キューバで発表された信頼できる数字を駆使して丹念に叙述しています。しかし、客観的な事件や事象の説明だけでなく、随所に、著者独自の判断や解釈も挿入されています。そして、キューバ政府の政策の肯定面、批判面も含め、これらの判断や解釈が抑制された筆致で客観的に書かれています。筆者の人柄もあるでしょうが、中々の筆力で、爽やかな読後感を与えるものとなっています。

著者は、本書でいろいろな興味ある判断を述べていますが、主要なものを、次に挙げておきます。括弧の中の数字は、同書における頁数です。

- 日本とキューバの両国の交流は、両方が学び合うのが真の交流である(28)。
- キューバの国益を追求する、旺盛なキューバの外交力に目を見張り、そこにキューバのしたたかさの一面がある(42)。
- キューバ国内の新たな状況では、ラウルの指導が集団指導で行われている(79)。
- キューバの改革は、国民の政治的支持を受けつつ行うため、急激なものでなく、少しずつの改革となっている(81)。
- マイアミの反カストロ研究集団の研究会は、荒唐無稽な政治的ショーにすぎないと違和感を覚えた(89)。
- 米国が、1982年以來、キューバをテロ支援国家に指定しているが、全くおかしい(90)。
- キューバは、他の国々に比べ人種差別が少ない国と日頃より感じている(98)。
- フィデルとラウルの間に確執があるというのは噂にすぎない(144)。
- 政府の上層部にはそれほど多く汚職は見られないが、ひどいのは中堅クラスから以下である(195-199)。

そして、著者は、現在のキューバの改革の本質を次のように指摘しています。

「キューバが、社会主義体制を守りつつ市場経済を導入し、発展を遂げていることは、中国・ベトナムと共通しているが、中国にしてもベトナムにしても人口規模が違うし、農村人口が多く、人口の都市への集中が進んでいるキューバとは違う。したがってキューバは独自の改革の道を歩んでいる」(223)。また、「この改革は、歴史的な実験であり、目が離せない」(237)と、キューバの改革の本質と独自の性格を的確に見据えています。なお、キューバの改革(スペイン語で「キューバの経済モデルのActualización」)を、筆者は、「現代化」と訳していますが(111)、評者は「刷新」が適切と考えています。

著者が、日本大使であっただけに、日本とキューバ両国の交流には、かなりの紙幅が割かれています。そのそれぞれの交流において、できるだけ両国の親善を図ろうとする西林さんの姿勢には心地良いものがあります。

チャリティー・コンサートで演奏する西林大使(132)→



なお、本書の副題は、「シジンは揺れても倒れない」となっています(38)が、「シジョン」(正式には、シジョン・メセドーラ *sillon mecedora* あるいは単にメセドーラ *mecedora*)は、一般にラテンアメリカで愛好されている肘掛付き揺り椅子です。座っている人は、前後に体をゆすりながら、リラックスして休んだり、本を読んだり、懇談したりします。前後に相当程度傾きますが、倒れることはありません。

80年代頃から、キューバは、「ピサの斜塔」と同じく、倒れそうで倒れないと言われてきました。ソ連が崩壊後にキューバ社会が激変を被り、アンドレス・オッペンハイマーが『カストロの最後の時』を書き、マイアミの亡命キューバ人達がキューバ帰還のスーツケースを用意した時に、キューバで日本大使を務められた宮本信生（1991-93年）さんは、その著書『カストロ』（中公新書、1996）で、カストロ政権は崩壊しないと述べられました（同書176-183頁）。



それから20年が過ぎ、今度は西林さんが、キューバでは、「アラブの春」のような、反政府運動、体制転換は起きないと述べておられます（128-131）。

←肘掛揺り椅子（シジョン）でラウル・フィデルと懇談するオルテガ大統領(2010年1月)

また、チャベス亡きあとのベネズエラとの関係についても「ソ連崩壊時のような経済危機

には陥らない」と予測されています(157)。オッペンハイマー（2011年4月11日「オッペンハイマーの予見力」参照）やゼーリック前世銀総裁（2012年8月12日「ベネズエラの選挙情勢をどうみるか」参照）などのバイアスがかかった見方と対照的な、キューバの現状を冷静に分析した卓見だと思われます。

本書では、誠に多岐に渡る問題が詳細に述べられています。一般の日本の書籍と同じように、本書にも索引がありません。索引と年表があれば、一層便利な改革最前線のレポートとなったことと思われます。

ラウルが述べているように、改革は、休まず、あわてずに、深く静かにキューバ社会で進行しています。西林さんの卓越した分析を今後も期待したいものです。

(2013年5月13日 新藤通弘)